

2019 年度メディア芸術連携促進事業

国内外の機関連携によるマンガ史資料の連携型アーカイブの
構築と人材育成環境の整備に向けた準備事業 実施報告書

令和 2 年 2 月

メディア芸術コンソーシアム JV

マンガ・アニメーション・ゲーム・メディアアート産学官民コンソーシアム /
一般社団法人マンガ・アニメ展示促進機構 / 大日本印刷株式会社

特定非営利活動法人 熊本マンガミュージアムプロジェクト 他

目次

内容

第1章 事業概要	3
1.1 事業の概要	3
1.2 事業の背景	3
1.3 事業体制.....	3
1.4 事業の内容	4
1.5 事業スケジュール.....	6
1.6 会議スケジュール.....	6
第2章 事業の成果・課題・評価.....	8
2.1 事業の成果	8
2.2 事業の課題	9
2.3 事業の評価	10
第3章 事業実施内容	12
3.1 共同保管に関する実践・調査.....	12
3.2 刊本の国内外連携機関への資料移送	13
3.3 マンガ史資料の取扱いに習熟した人材育成活動.....	15
3.4 実施会議内容.....	15
3.4.1 事業開始会議	15
3.4.2 中間報告会.....	18
3.4.3 省察会議	19
3.4.4 マンガ分野合同シンポジウム.....	24
付録.....	34
1.1 全国公共図書館アンケート「マンガ史資料アーカイブ」に関する調査報告	34
1.2 刊本パッケージ作成マニュアル.....	36

目次

1.2.1 作業全体の作業の流れ.....	36
1.2.2 パッケージ化の順序（2018年度の作業例）	37
1.2.3 実際に作成したパッケージ（2018年度）	37
1.3 複本プール資料活用マニュアル.....	41
1.3.1 雑誌と単行本の区分	41
1.3.2 単行本の分類.....	42
1.3.3 単行本のデータ化.....	43
1.3.4 雑誌の分類	44
1.3.5 雑誌のデータ化	45
1.3.6 刊本収蔵の今後の課題.....	46

第1章 事業概要

1.1 事業の概要

本事業の目的は、産・学・官・民・自治体等の連携・協力により、メディア芸術分野において文化資源として重要な位置を占めるマンガ(大量複製された刊本)の史資料の収集、保存、活用を実践し、その成果を検証することで、作業手法の進化や開発を図ることである。同時に、連携型アーカイブの構築のためのアーキビスト育成と、マンガ文化の保存の意義を広く一般に啓蒙普及していくための事業を行う。

1.2 事業の背景

現代日本のポピュラーカルチャーで重要な位置を占めるマンガの史資料は、大きく分けて、「(複製大量印刷物である)雑誌・単行本」と「原画」という、二つの主要な資料群から構成される。この資料群を対象とする史資料のアーカイブには、以下のように二つの大きな課題がある。

1) 日本国内のマンガ資料館(マンガ資料のアーカイブ)の多くは、(大量複製物である)「マンガ雑誌や単行本」を対象として収集と展示を行う運営形式をとっているが、多くの資料館が資源(収蔵スペース、入館料金等の収入からなる運営資金、専門的な知見を持つ人材など)の不足という課題を慢性的に抱えており、解決策を模索している状況である。

2) とりわけ昭和時代のマンガ文化を支えたマンガ家の逝去や出版不況の影響で、マンガ「原画」が遺族によって廃棄されたり、出版社の経営不振などにより返却されるなど、従来の「原画」保管基盤が、ここ数年で急速に崩壊しつつある。売却面においては、中国や欧米諸国の収集家によって、かつての浮世絵と同じく美術作品と見なされ、蒐集[しゅうしゅう]のための情報収集がなされているが、日本国内においては、都度状況に応じて価値付けがなされるに留まっており、定まっているとは言えない状態にある。国内での価値付けがなされていない希少性の高い「マンガ雑誌や単行本」及び「原画」は、公共の文化資料として評価し理解される機会を得ることがないため、何の対策も取られぬまま、蒐集家の求めに応じて海外へ四散流出してしまい、浮世絵と同様の状態を招く可能性が極めて高くなっていると言える。

また「原画」の価値付けの作業(「原画」に対する評価)は、大量複製をともなう文化の史資料の位置付けを軸に検討されることで初めて可能となるのであり、「原画」を実質的な版下にして作品を掲載した「マンガ雑誌・単行本」(のアーカイブ)を参照しながら価値付けの検討を進めることが肝要である。

1.3 事業体制

第1章 事業概要

コーディネーター：鈴木 寛之（熊本大学文学部 准教授）

連携機関：明治大学、京都国際マンガミュージアム、熊本大学、特定非営利活動法人熊本マンガミュージアムプロジェクト、北九州市漫画ミュージアム

■事業メンバー

コーディネーター	鈴木 寛之	熊本大学 文学部 准教授
オブザーバー	吉村 和真	京都精華大学マンガ学部教授・副学長
メンバー	橋本 博	NPO法人熊本マンガミュージアムプロジェクト代表
	伊藤 遊	京都精華大学 国際マンガ研究センター 研究員
	森川 嘉一郎	明治大学 国際日本学部 准教授
	柴尾 晋	明治大学図書館 図書館総務事務室
	表 智之	北九州市漫画ミュージアム 専門研究員

1.4 事業の内容

過年度までの連携共同事業より、刊本送付の推進及びその整理による人材育成が行われてきており、着実に成果を上げている。上記事業背景をふまえ、原画事業と対になることから事業継続を実施する。主な事業内容としては以下を想定している。

1) 共同保管に関する実践・調査

メディア芸術の一翼を担う、一次資料としてのマンガ本（マンガ雑誌やマンガ単行本等にて、年間に1万種類発行されている）の収集と活用は、マンガ文化の振興を支援する作業だが、その資料の膨大さとメディアとしての多様性は、日本各地の収蔵施設（およそ70施設）が抱える共通の問題である。

本事業では、膨大なマンガ・史資料を、どこか一ヶ所に集めるのではなく、全国に点在する収蔵施設をネットワークで繋ぎ、その上で現物資料と情報の相互利用を促進するという、マンガ資料に関わる「共同収集・共同整理・共同保存・共同活用のシステム」構築の足掛かりを作ることを目的とする。つまり「それぞれの所蔵館で何をどのように収集・整理・保存・活用するか」という問題と、「オールジャパンで収集・整理・保存・活用を行う可能性と課題は何か」という問題を双方向的に意識しながら、連携共同体制の下、資料現物の移動や管理、データベースの構築や共有などの活動に取り組むものである。

過年度より保存施設として活用している熊本・森野倉庫を「複本プール」として位置づけ、資料の収集・整理・保存が抱える現時点での諸課題の解決方法を具体的に探り出し、更に資料そのものの新たな価値や可能性をも探り出すことで、近い将来取り組むべき問題点を浮き彫りにしていくことを企図している。

また全国公共図書館等へ協力を要請して、マンガ「雑誌・単行本」資料に関する総合的な調査（所

第1章 事業概要

蔵や配架の状態、収蔵スペースの不足状況、新たな資料受入の要望など)を行い、共同保管事業のニーズ(既存資料の保管要望、もしくは新規資料の受入要望)を把握するための調査も実施し、ニーズに沿った「複本プール」の在り方を検討するとともに、国内施設で「複本プール」になりえる施設についても調査する。

2) 刊本の国内外連携機関への資料移送

「複本プール」の役割機能として国内外よりマンガ資料を必要とする、マンガ関連施設等への移送を目的とする。昨年度まで実施してきた国外移送についても継続し実施することにより、海外からも「複本プール」が認識され、価値が高まると考える。また国内においても将来増えていくと思われる「マンガ施設」に対しての窓口となることが想定されるため、「複本プールマニュアル」の作成にも着手していく。

【国内連携先(熊本県・高知県)】

- ・コミュニティスペース縁側(八代市) ・上天草市マンガカフェ準備室
- ・湯前まんが図書館(球磨郡湯前町) ・高森湧水館(阿蘇郡高森町)
- ・橋本二郎記念 たまな創生館(玉名市) ・合志マンガミュージアム(合志市)
- ・北熊本 SA 下り線「くまもと MANGA プール」(熊本市北区)
- ・健軍まんが図書室(熊本市東区) ・松尾西小跡(熊本市西区) マンガ利活用施設
- ・高知まんが BASE(高知県)

【国外連携先】

- ・アルゼンチン・コロンビア・ブラジル

3) マンガ史資料の取扱いに習熟した人材育成活動

「複本プール」では、全国より集まってくる寄贈本等の資料を整理し、複本セットを組むスキルを要する。また、資料データ整理に当たっては、「メディア芸術データベース」とも連携し、取得するデータ項目についても仕様を統一していき、昨年度の人材育成にて培った「複本セット」方法についてもマニュアル化に着手することにより、全国の「マンガ関連施設」スタッフへの人材育成にもつながると考える。

また上記実作業とともに国内外連携先に移送した資料の利活用状況及び現地ニーズ把握のためのインタビューを実施し、マニュアルを作成することで、今後のアーキビスト育成に向けた効果が期待できると思われる。

今後は、熊本大学に新設されたマンガ関連コース(文学部コミュニケーション情報学科 現代文化資源学コース)とも連携し、成果物としてアーキビスト育成に取り組むカリキュラムの作成を目指す。

4) シンポジウムの開催

本事業5年間の総括としてのシンポジウムを開催し、「複本プール」の価値を確立するとともに、

第1章 事業概要

施設の重要性と人材育成（マンガアーキビスト育成）への取組を発信する場とする。また「複本プール」の将来展望に向けたマイルストーンを公表する場とする。

1.5 事業スケジュール

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	▶				▶	▶	▶		▶	
	事業開始会議				中間報告会	省察会議	シンポジウム		最終報告会	
スケジュール	▶									
	資料整理：京都MM・明治大学・森野倉庫									
						▶				
						資料移送：国内連携先・海外連携先				
	▶									
			人材育成活動							
		アンケート・複本プール			施設調査					

1.6 会議スケジュール

①事業開始会議

日時：2019年6月14日（金）16時30分～19時00分

場所：京都国際マンガミュージアム AV ホール

②中間報告会

日時：2019年10月15日（火）13時00分～15時40分

場所：大日本印刷株式会社 DNP 五反田ビル 1F ホール

③省察会議

日程：2019年11月26日（火）～11月27日（水）

場所：熊本県球磨郡湯前町 「奥球磨 ゆのまえ温泉 湯楽里」 会議室

④マンガ分野合同シンポジウム

第1章 事業概要

日程：2019年12月17日（火）13時00分～17時00分

場所：大日本印刷株式会社 DNP 五反田ビル 1F ホール

第2章 事業の成果・課題・評価

2.1 事業の成果

1. 共同保管に関する実践・調査

熊本・森野倉庫を連携機関が資料を共同保管する「複本プール」として位置づけ、資料の移送・分類・整理・保存の各段階で生じる課題を抽出し、マンガ史資料の連携型アーカイブ構築をめざすうえで近い将来取り組むべき更なる課題を明らかにした。

また全国の公共図書館等へ協力を要請して、マンガの「雑誌・単行本」資料に関する総合的な調査（所蔵や配架の状態、収蔵スペースの不足状況、新たな資料受入の要望など）を行い、共同保管事業のニーズ（既存資料の保管要望、もしくは新規資料の受入要望）を把握し、ニーズに沿った「複本プール」の在り方を検討するとともに、国内施設で「複本プール」になりえる施設についても検討を行った。

公立図書館に対するアンケート調査によって、マンガ史資料の収蔵に対する関心の高さや、共通の課題及び工夫について明らかになった。1,474件の調査対象館のうち47%から回答があり、そのうちの79%でマンガ史資料の収蔵がすでに行われており、収蔵数が1,000冊を越える施設がその約半数に及んだ。マンガ史資料収蔵への取り組み方としても、文化芸術基本法など収蔵の意義を根拠づける法令を明示しての回答も散見され、マンガ史資料が持つ文化的ないし教育的意義について、公立図書館の現場での理解が今や相当に進んでいることがうかがえる。

本事業に対する関心も高く、自由記述形式で希望や質問を募る設問では、本事業の意義を肯定的に受け止め、今後の展開に期待する声が多く見られた。実際に資料を融通するに当たっては、公立図書館からアーカイブセンターへの寄贈についてはややニーズが低い一方で、アーカイブセンターから公立図書館への寄贈については、全回答数の4分の1弱から希望・関心が示されている。

公立図書館が共通して抱える、スペースと予算とスタッフの不足、及び指定管理者制度が宿痾として抱える、決定権者と現場の懸隔・断絶があらためて浮き彫りになるなど、見えてきた課題も多かったが、総じて、マンガ史資料の共同保管事業に対するニーズが質・量ともに可視化され、アーカイブセンターの構築に向けた重要な立脚点の一つになったと言える。

2. 刊本の国内外連携機関への資料移送

京都国際マンガミュージアム・明治大学・北九州市漫画ミュージアムの各施設にあるマンガ史資料を熊本に移送し分類整理することで、未整理資料のパッケージ化・利活用が可能となった。その結果、10,000点を超える資料を国内外の関連施設に移送（2019年度は高知県に雑誌資料、南米の連携機関へ単行本を移送）する作業を通じて、マンガ資料を活用する機関を増やし、近い将来、マンガ史資料の連携型アーカイブを構築するためのネットワークが強化された。

3. マンガ史資料の取扱いに習熟した人材育成活動

事業に携わった人員の中から、マンガ史資料を効率よく分類・整理・データ化し、資料送付先機関の特性に合わせたパッケージ作成ができる人材の育成を行った。またその経験から得た知見をマニ

第2章 事業の成果・課題・評価

ュアルとしてまとめた。熊本で事業に携わったメンバーの一部（大学院生）はマンガ関連施設・団体で雇用された。

4. シンポジウムの開催

原画事業との合同シンポジウム「マンガが先か!?原画が先か!?’ 「マンガのアーカイブ」のネクストステージに向けて」では、本事業の各部会の成果が報告されたほか、原画事業と刊本事業が連携して今後のアーカイブをいかに進めていくべきかについて、作家、研究者、収蔵施設それぞれの立場から活発な意見交換がなされた。

2.2 事業の課題

1. 共同保管に関する実践・調査

関連施設間の連携は促進され、未整理だった資料を整理・利活用することができ、ニーズも把握することができたが、全国の関連施設の需要に応えられる複本プールとしての機能の整備や、施設を維持するための経済的基盤の整備ができていない。今後は、何をもって「複本」とするかの判断基準の明確化が必要となる。全国で資料の共同保管を行う体制についての構想は出来たが、その実体化も今後の課題である。

また、公立図書館に対するアンケート調査からは、マンガ史資料の収蔵やアーカイブセンターと連携しての共同保管に対する関心の高さはうかがえるものの、実際に事業化する上ではいくつかの課題があることも具体的に明らかとなった。共通して見て取れるのは以下の4点である。

(a) 収蔵スペースが足りない

これは、マンガ史資料が総体的に持つ物量の多さに比して「足りない」というレベルではなく、そもそもスペースがもう無い、というニュアンスが濃いようだ。ただ、利用者のニーズやマンガ史資料の文化的・教育的意義の高さから、恒久的な収蔵は難しくとも、通常の「相互貸借」「相互利用」に近い形で運用したいという声が多かった。

(b) 予算が足りない

これも前項同様、マンガを体系的に集めるには足りないというのでなく、余裕がそもそも皆無のようだ。したがって、アーカイブセンターからの寄贈は良いサポートとなる反面、輸送費の捻出はみな共通して「難しい」とのこと。

(c) 人員が足りない

前々項・前項同様に、そもそもの絶対数が足りない。加えて、膨大かつ重層的な広がりを持つマンガ史資料の中で、何が公立図書館として適切で、かつ利用者のニーズに合ったものなのかを見定め得る専門的な知見にも、既存の公立図書館の人員体制の中では不安が伴うようだ。

(d) 資料収集方針に合致しない

公立図書館を設置し運用する自治体が定める、「資料収集方針」等の運用規則の類に、そもそも「マンガは扱わない」と明記されている例も少なくないようだ。現場としては導入したくとも、図書館を

第2章 事業の成果・課題・評価

実地に運用する「指定管理者」には、その種の方針を変える権限は一切ない。自治体に意見して変更してもらうにも、マンガ史資料の実際の文化的・教育的意義や利用者のニーズの高さに疎い自治体内の決定権者たちに、幅広く理解を得ることは相当に困難であろうとは、容易に想像がつく。

総じて言えば、公立図書館がマンガ史資料のアーカイブセンターに対して求めているサポートとは、「権威ある専門的知見に基づいて、公立図書館向けに適切に選書された資料群を、恒久的な収蔵ではなく一時利用の形態で、輸送費の負担なく提供すること」であると言えよう。この期待にどこまで応えることができるかは大きく重い課題だが、課題が明確になったことは重要な成果である。

2. 刊本の国内外連携機関への資料移送

森野倉庫を複本プールとして位置づけ、関連施設へのマンガ資料パッケージの供給については実績を挙げてきたが、パッケージに入らなかった資料を始めとする在庫の管理、リスト作成、本の出し入れ等の出納業務が出来る態勢をつくることが次期の課題である。

3. マンガ史資料の取扱いに習熟した人材育成活動

熊本で事業に携わったメンバーの一部はマンガ関連施設・団体に雇用されたが、事業全体としては、期限付きの雇用ということもあって人が定着しにくく知見の共有がむずかしい面がある。今後は作業マニュアルの精度を高め、スキルアップのためのカリキュラムを整備すると共に、育成した人材の雇用先の確保・創出が重要課題である。

4. シンポジウムの開催

原画事業との合同シンポジウム「マンガが先か!?!原画が先か!?!」での成果をふまえ、刊本事業においても将来的な「マンガのアーカイブ」が「ありたい」「ありうる」「あるべき」姿を丁寧に見定めるべく、事業全体の動向と活動をふまえ、毎年度の更なる充実が果たせるシンポジウムの実施準備に計画的に取り組む。

2.3 事業の評価

まず 2019 年度に関しては、「複本プール」の集積地であり、これまでマンガ刊本の収蔵に関わる各連携先との調整役であった熊本マンガミュージアムプロジェクト及び熊本大学が母体となったことで、本事業の目的である施設間連携がいっそう促進された。とりわけ本年度は、従来の各施設での作業に加えて、熊本県下における複数の施設に対し、これまでの事業を通じて収集・整理してきたマンガ雑誌・単行本を送り出し、アーカイブ資料の活用事例を蓄積したことは注目に値する。さらに年度末に実施された、高知県の新施設（高知まんが BASE）へのマンガ雑誌を中心としたコレクション寄贈は、今後の全国展開に向けた確かな足掛かりとなった。過年度の明治大学を拠点とした海外展開とあわせ、国内外の関連施設・機関との連携拡大が期待できる。

続いて 5 年間の総括としては、何より各連携先での地道な取り組みによる実績を評価すると同時

第2章 事業の成果・課題・評価

に、年度順に京都精華大学・明治大学・熊本大学と、一貫して大学を軸にプロジェクトを遂行できたことを、マンガ刊本のアーカイブに関する専門的知見の集積と継続的な人材育成という観点から評価したい。上記「事業の目的・背景」で指摘されている通り、膨大なマンガの雑誌・単行本を体系的に収蔵するには、そもそも全国分散型のアーカイブが必須である。その準備段階となる課題発見と課題解決を想定した本事業は、将来的なマンガのナショナル・アーカイブにとっての先駆的かつ具体的なモデルとして、一定の成果を上げたと言えよう。

ただし、この5年のあいだにも国内外で関連施設は増えており、連携の強化や拡大を求める声はますます高まることが予測されるため、これに備えた制度・組織の構築が早期に求められるだろう。特に事業を通じて得られたアーカイブに関する知見やスキルの共有は、今後の施設間連携にとっての重要課題である。また、大学と自治体との連携を軸とした現行の取り組みに加え、出版社を中心とした産業界との「産学官」連携が必要となるだろう。同時進行しているマンガ原画アーカイブ事業との一体化を視野に、今年度の合同シンポジウムでテーマに掲げた「マンガのアーカイブ」のネクストステージを実現すべく、さらに開かれた連携施設間の協議の場として、本事業の継続・発展に期待するものである。

第3章 事業実施内容

3.1 共同保管に関する実践・調査

■全国公共図書館アンケート

「マンガ史資料アーカイブ」に関する調査報告

1. 調査方法と回答数

方法：「日本図書館協会」加盟館から公立図書館 1,474 件を抽出しアンケート郵送

回答数：696 件（47%）

2. マンガ単行本・雑誌の収集に関心がある。

YES：494 件（71%） NO：193 件（28%） 未回答：9 件（1%）

◇Key Word [以下、KW]：スペース、選書、予算、資料収集方針、理解、地域書店とのすみ分け

3. マンガ単行本・雑誌を既に収集している。

YES：548 件（79%） NO：104 件（15%） 未回答：44 件（6%）

4. 収集しているマンガのおよその分量について教えてください。

【単行本】10,000 冊以上：29 件 1,000～9,999 冊：238 件

100～999 冊：221 件 100 冊未満：29 件 計数不能：40 件

◇KW：学習マンガ、ハウツー本、エッセイマンガ、郷土資料、統計がない

【雑誌】定期タイトル 10 誌以上：24 件 定期タイトル 10 誌未満：28 件

1,000 冊以上：17 件 100～999 冊：14 件 100 冊未満：9 件

計数不能・所蔵なし：8 件

◇KW：児童書、定期、保存期間、廃棄

5. 収集している単行本の主な作家・作品名について教えてください。

「手塚治虫、長谷川町子 手塚治虫文化賞マンガ大賞、文化庁メディア芸術祭マンガ部門大賞受賞作マンガ大賞など」

6. 選書の基準について教えてください

◇KW：郷土、主題性、性、暴力、反社会、人間の尊厳

「文化芸術振興基本法 第 26 条に基づき収集。・地域の産業や生活、福祉等の地域の課題に関する内容で、入門書として利用できるもの。」

「活字と比較するのではなく独自の媒体としてその内容を評価し、ハードカバーのものを中心に収集する。」（資料収集方針より）

「来館する小・中学生に話を聞いたり、書店で人気のものを調査しています。」

第3章 事業実施内容

7. 将来的にマンガ単行本・雑誌の収蔵を行いたいと考えている。

YES : 134 件 (19%) NO : 229 件 (33%) 未回答 : 333 件 (48%)

◇KW : スペース、選書、予算、資料収集方針、理解、ニーズ、装丁、絶版

「マンガを積極的に収集している際、利用者（大人）のマナーが悪く、不明本も多かったため。」

「マンガは、購入、収蔵しないことが、指定管理の指示事項のため。」

8. マンガ単行本・雑誌を収蔵する理由・目的を教えてください。

◇KW : ヤングアダルト、郷土、読書推進、情報源、知る権利、日本語学習

「図書では得られない速報性と多様性に富み、新主題についての記事が載るなど重要な情報源であり、市民の趣味や生活に役立つ、市民の幅広い要求に応えるため。」

「マンガという表現形態というだけで、収蔵しない、という理由はないと考える。但し、一般の本に比べて、選書には時間をかけるべきだと思う。」

9. 収蔵を行ううえでの課題（空間、予算、専門人材、その他）について教えてください。

◇KW : スペース、選書、予算、寄贈、マナー、バランス

「ラノベと一緒に、何でこれは良くてあれはダメなのか等、トラブルのもとになる」

「全巻揃ってからでは旧巻が購入できない。」

10. マンガ資料を集積した「共同保管倉庫（複本プール）」からの本の受け入れ（本題は無償で送料のみ負担）が可能だとしたら、どのような単行本（年代・ジャンルなど）や雑誌を、どのくらいの分量受け入れることが可能かを教えてください。

希望あり : 165 件 不可能・困難 : 314 件 回答保留 : 56 件

◇KW : スペース、送料、貸出、補充、リスト、リクエスト

「当館は既に閲覧室・書庫とも余裕はない。受入するものが永久保存全体であるならば多くは難しい。」

「イベント等の時期にあわせ、展示貸出できる分量」「不可能（職員が足りない）」

3.2 刊本の国内外連携機関への資料移送

■刊本「複本プール」への資料移送

1. 京都国際マンガミュージアム／京都精華大学国際マンガ研究センターによる具体的作業

①複本マンガの移送

2019年8月2日（金）

同館／同センター所蔵の複本マンガ本を保管していた元・待賢小学校倉庫より、NPO 法人熊本マンガミュージアムプロジェクトへの寄贈という形で、以下の資料を森野倉庫に搬出（翌日森野倉庫にて受入・搬入）

第3章 事業実施内容

- ・マンガ雑誌 354 箱
- ・マンガ単行本 84 箱
- ・翻訳日本マンガ単行本 217 箱
- ・その他研究参考資料 57 箱

2. 明治大学での具体的作業

①複本マンガの収集・選書

コミックス 合計 168 箱 (約 8,500 冊)

- 1) 明治大学キャンパス内の複本マンガ資料 (76 箱)

米沢嘉博記念図書館スタッフが行う

- 2) 現代マンガ図書館内の複本マンガ資料 (92 箱)

現代マンガ図書館スタッフが行う

②複本マンガの移送

2019年10月4日(金)

- ・現代マンガ図書館複本マンガ約 8,500 冊を熊本森野倉庫へ搬出

③パッケージ済み複本マンガの海外搬送

2020年2月

- (1) ブラジル: サンパウロ大学

- (2) コロンビア: ロザリオ大学

EAFIT 大学

- (3) アルゼンチン: 日亜学院 合計: 1,550 冊

3. 北九州市漫画ミュージアムによる具体的作業

①複本マンガの移送

2019年10月13日(日)

同館が寄贈を受け入れたマンガ資料のうち、収蔵対象から外れるものについて、NPO 法人熊本マンガミュージアムプロジェクトへの再寄贈という形で、以下の資料を森野倉庫に搬出(同日森野倉庫にて受入・搬入)。

- ・翻訳日本マンガ単行本 43 箱
- ・マンガ単行本 82 箱

■複本マンガの国内連携館への搬送

京都国際マンガミュージアム・明治大学・北九州市漫画ミュージアムから移送された刊本資料を森野倉庫の複本プールに集積、整理分類のうえ雑誌・単行本のパッケージ化を行った。2019年度、国内分では2020年春に開館予定のマンガ文化施設(まんが王国・土佐情報発信拠点「高知まんがBASE」)での利活用を目的として、高知にマンガ雑誌 2,233 冊を搬送した。国外分はブラジル・サンパウロ大

第3章 事業実施内容

学、アルゼンチン・日亜学院、コロンビア・ロザリオ大学、コロンビア・EAFIT 大学の4ヶ所に、計1,550冊の単行本を搬送した。

3.3 マンガ史資料の取扱いに習熟した人材育成活動

1. 複本プールマニュアル作成と人材育成

将来的にマンガ史資料の連携型アーカイブを構築するために必要となる共同倉庫、複本プールのありようについてスタッフ間で協議を行い、森野倉庫での作業経験にもとづいた施設の運用・維持に関する課題を抽出した複本プールマニュアルを作成し、史資料の取扱いに習熟した人材の育成を行った。

2. パッケージマニュアル作成と人材育成

共同倉庫の複本を利用したパッケージ作成作業と並行しながら、マンガ史資料を効率よく分類・整理・データ化するためのノウハウについて協議し、大学院生を中心とするスタッフで、資料送付先の特性に合わせたパッケージ作成方法に関するマニュアルの作成・改訂作業を行い、史資料の取扱いに習熟した人材の育成を行った。

3.4 実施会議内容

3.4.1 事業開始会議

日時：2019年6月14日（金）16時30分～19時00分

場所：京都国際マンガミュージアム AV ホール

出席者：鈴木寛之、吉村和真、橋本博、伊藤遊、表智之、柴尾晋、斎藤宣彦

（文化庁） 牛嶋興平

（事務局） 鈴木守、池田敬二、岩川浩之、星合信宏、藤本真之介、横江愛希子

議題：・両事業（原画・刊本）における全体ビジョン共有（吉村オブザーバー）

- ・今年度の事業方針（鈴木コーディネーター）
- ・取組み内容の詳細（各施設より）、スケジュールの確認
- ・会議日程調整
- ・シンポジウム開催について

●両事業（原画・刊本）における全体ビジョン共有（吉村オブザーバー）

- ・マンガのアーカイブはこの両輪で構築するのが本筋である。2事業を有機的に結びつけることにより引き出される重要性や可能性がある。
- ・今後は海外でも総合的に扱われるスタイルが広がっていくと思われる。
- ・国内外に送り出す基地（ハブ）の役割を担っていた熊本・森野倉庫に、来年度以降を見据え、今年度はコントロール出来る立場として関わりを求めたい。
- ・今までの取組みで特徴付けた活動の強み・出てきた課題を集約しながら、来年度より多くの

第3章 事業実施内容

関係機関、国内外エリアを視野に入れ、2事業を結びつけていかなければいけない。

●今年度の事業方針（鈴木コーディネーター）

- ・今までは複本プールの実質化を目指して取組んできた。熊本県内で9つの連携先があり、中にはNPO法人が運営している所や市が構想中の建物、廃校を利用した利活用施設もある。
- ・今年度は送られた本がどのように活用されているか調査、どういう補充が必要か、新しい連携先の模索や海外にも連携先を作れたらと考えている。
- ・作業を通して、熊本大学大学院生を主とし、マンガ史資料の取扱に習熟した人材育成を目指してやってきた。質・内容・各施設が求めている本がどのようなものなのかすり合わせが必要。
(橋本)
- ・森野倉庫とは、4～5年前から様々な施設から送られた本を整理し、パッケージにして、色々な施設へ発送してきた倉庫であるが、現状は倉庫のキャパを超えつつあった。事情が変わり、拡大が可能になった。
- ・次の年度は九州全体にマンガ施設を作ることを目指している。徳島県からもオファーが来ている。
- ・本の流通がこれから多くなる状況、整理する人材の育成も必要。どういう方法・基準で整理するのかというマニュアルも必要。
- ・ビンテージマンガの保管先・大量の複本をどうするか2つが問題。

●取組み内容の詳細（各施設からの現状報告を含む）、スケジュールの確認

【北九州市 MM】（表）

図書資料は約8万冊収蔵し、うち約3万冊が複本や破本（欠巻のあるシリーズもの）でバックヤードに保管。開架もバックヤードもすでにオーバーキャパ。新着図書を配架できない、寄贈図書を開梱し整頓する作業スペースがないなど、深刻な状況。積極的ではないが、寄贈は受入れている。今年度は複本や端本を大規模に放出し再寄贈してスペースを確保した上で、より積極的な寄贈受入と再寄贈に取り組みたい。またかねて懸案のマンガバンク的な仕組み、再寄贈の受入先であるとともに、欲しいものが返ってくるシステム構築を切望している。

今年度予算は妥当。7月以降、複本等まとめて熊本へ送付した上で、さらなる寄贈本を選び分け、順次発送する分に残額を充てたい。

【京都 MM】（伊藤）

収蔵率100%を超えている。余剰分は地下の廊下や市内の別の休校した小学校へ移しているがダンボールそのまま、保存環境としては最悪である。目算で900箱程度あり、今年中に移動させたい。2年前は熊本倉庫を活用したサテライト構想もあったが断念、コストが一番かかるのは、仕分け・再寄贈引取りに影響のあるデータ取りだった。

【明治大】（柴尾）

2つのマンガに関する図書館（現代マンガ図書館・米沢嘉博記念図書館）がある。現代のほ

第3章 事業実施内容

うは複本7万3千冊、他にデータが無い分で1万冊ある。寄贈申し出はあるがスペースが無い状態。附属中・高校跡地も再開発話が出ている。問題点は特に複本についてのデータが無く「どういうマンガがあるのか？」分からない。また、体積が大きい雑誌の取扱いに困っており、利活用を検討したい。

【明治大米沢嘉博記念図書館】（斎藤）

当館は米沢嘉博旧蔵書約14万冊寄贈を受け、2009年にオープンした。雑誌の量が多いのが特色。単行本・雑誌は正・複本に分け、正本を登録している。10万冊がマンガ、うち2万冊が複本。

バックヤードの複本の山の整理を図書館通常業務の中に取り込むのは、「いつまでに・どこへ送るか」などの見込みが無いと難しい。保管庫はすでに満杯であり、現状、寄贈受入れに関しては消極的にならざるを得ない。

【クママン森野倉庫】（橋本）

正・複混じった在庫のデータが無く、整理がとても大変。

スペースさえあれば全て棚に並べ、セットにしやすくなる。サテライト機能は可能。

鳥取の温泉まんが館に視察に行った。倉庫に古書20万冊程で同じ本がずらりと並んでおり、これならセットを作ることは簡単だろうと思った。このようなイメージのプール（倉庫）をいくつか作るという方向も検討出来る。徳島県から話も来ている。

（吉村オブザーバー）

以前から提言していた「1県1館まんがミュージアム」のイメージに近い。これは「倉庫」でその場所からパッケージを送り出せる機能を持てばいい。熊本森野倉庫がモデルケースになれば、ネットワークの構築を考えた時の様々な課題に答えられるのではないか。

（鈴木コーディネーター）

全国展開を見据えながら実験をまず熊本でやっている。各施設にどういう受け入れ先を作るかが問題。

（吉村オブザーバー）

原画と同じくナショナルセンターが窓口となり情報を集約後、熊本へ振分けると理想的。

（橋本）

今までは単行本中心で、雑誌は置いていかれていた印象。劣化が進み、破棄されていく状況が起こってくる。今年度は難しいかもしれないが、雑誌しか置いていない場所があってもよいのでは。

（その他）

- ・役割分担を決めてはどうか。マニュアル作成・複本プール施設アンケート調査など。
- ・全国のニーズを探る為、またメンバーを増やす調査をする。
- ・自治体や地域の学校図書館にまんがを導入のための検討会をしてもよい。

●会議日程調整

●シンポジウム開催について

第3章 事業実施内容

- ・刊本と合同開催。場所と時期を検討。
- ・出版関係、行政機関の人たちに届けることを想定すると、東京での開催が妥当ではないか。
- ・当初の予定では1月開催。前倒しは実作業に影響があり、後倒しは報告書に影響がある。
- ・平日開催なら一般人は巻き込めなくなるが、マスコミへはアピール出来る。
- ・AM：原画／PM①：刊本／PM②：関係者ディスカッション のスケジュールイメージ。

【決定事項】

- ・12月17日（火）原画・刊本合同シンポジウム 開催決定
- ・複本マニュアル作成メンバー：鈴木・橋本
- ・複本プール施設調査メンバー：鈴木・橋本・吉村・伊藤

【継続審議事項】

- ・シンポジウム場所の検討
- ・他省察会議、事業開始日他日程。後日別途打合せにて決定。

3.4.2 中間報告会

日時：2019年10月15日（火）13時00分～15時40分

場所：大日本印刷株式会社 DNP 五反田ビル 1F ホール

「国内外の機関連携によるマンガ史資料の連携型アーカイブの構築と人材育成環境の整備に向けた準備事業」 中間報告会

報告会参加者：

- ・鈴木寛之（熊本大学 文学部） * 報告者
- ・橋本博（特定非営利活動法人熊本マンガミュージアムプロジェクト）
- ・柴尾晋（明治大学 学術・社会連携部 図書館総務事務室）

1. 報告内容

本事業の最終目標は、「マンガ雑誌・単行本アーカイブ」に関する将来構想の検討、連携機関をつなぐネットワークの構築、持続可能な拠点の形成と専門的人材の育成の3つ。将来のビジョンとして、メディア芸術領域における「マンガ雑誌・単行本アーカイブ」の機能を担保すべく、人・物・情報を総合的に集約するための拠点を整備することを目指す。

具体的な事業内容として、まず①共同保管に関する実践・全国調査。公共図書館でマンガの収蔵現状を把握し、複本プール・共同保管倉庫に収集・保管されたマンガを移送する必要があるのかを調べるためのアンケートを作成・発送準備中。②刊本の国内外連携機関への資料輸送。各連携施設に向けて、単行本もしくは雑誌主体のパッケージを送付準備中。③複本プールマニュアル作成と人材育成。熊本の複本プール・共同保管庫の状況を基に複本プール設置に関するマニュアルを作成し、国内の他の地域での活用を目的とする。④パッケージマニュアル作成と人材育成。複本のパッケージ化に当たってどのような分類整理が可能か、また各収蔵施設の特徴に合わせたパッケージづくりの方法などを、マニュアルとしてまとめている。⑤シンポジウム開催の内容は、刊本事業の意義と可能性について

第3章 事業実施内容

て総合的に論じる。以上の5つの事業を進めている。

主な課題としては、共同保管倉庫のスペースの確保、施設維持・人材確保の方法の確立、複本データの取得書誌項目の検討、マンガ単行本・雑誌以外の資料の活用方法、刊本のデジタル資料化などがある。

2. 2つの事業に対する議論・助言

赤松健委員（公益社団法人日本漫画家協会）は「ビジネス化していくのなら、作家に優劣をつけないといけない。国立国会図書館の『亞書』騒動によって、納本を拒めない場合の問題も浮き彫りになった」と収蔵物の内容について問題提起。続けてデジタル化について、「インターネットにおいて無料でプールされている雑誌に対しては、YouTubeが行っているコンテンツID（著作権を保護するためのシステム）のようなシステムをプラスして、権利者に収入が入る形式にするのが現実解だろう。雑誌や新聞のデジタル化に当たり、権利がとれなかった部分は黒塗り、かといって文通コーナーで個人情報に記載されているといった問題があるため、そういった課題を解決し、先のシステムも導入される形がよいのでは」と意見。

森川嘉一郎委員（明治大学 国際日本学部）は、マンガ原画アーカイブセンターについて、「必要性の説明として分かりやすいのが原画。浮世絵の流出のような散逸を防ぐために、センターが受け入れ窓口となるハブの役割として機能し、その後の保管・管理はネットワークへ連携される仕組みになるのではないかと。ネットワーク機能を概説するたたき台の作成が急務だ。国の機関であれば比較的クリアしやすくなる電子化費用や権利問題を、制度設計に組み入れて運用する考え方もあるだろう」と述べた。

清水保雅委員（株式会社講談社）からは、連携型アーカイブについて「学校や児童施設にはどれくらい送られているのか」と問うと、橋本氏は、「1館当たり7,000から1万5,000冊で、小学校は3万冊ぐらいの予定になる。インプットがたまる一方で、出先が決まらず限界が近い」と現状を伝えた。

3.4.3 省察会議

日程：2019年11月26日（火）～11月27日（水）

場所：熊本県球磨郡湯前町

「国内外の機関連携によるマンガ史資料の連携型アーカイブの構築と人材育成環境の整備に向けた準備事業」 1日目会議「刊本事業の将来構想について」開催

日時：2019年11月26日（火）17時00分～19時00分

場所：「奥球磨 ゆのまえ温泉 湯楽里」会議室（熊本県球磨郡湯前町1588の7）

参加者

●刊本メンバー

鈴木寛之・橋本博・吉村和真・伊藤遊・森川嘉一郎・柴尾晋・表智之・松岡星

●文化庁

第3章 事業実施内容

牛嶋興平

●JV 事務局

池田敬二・岩川浩之・藤本真之介・横江愛希子

※敬称略

1. アンケートについて

全国の美術館や博物館、図書館など対象にした刊本事業のアンケートについて、事務局から集計状況の説明があった。

2. シンポジウムについて

- ・12月17日に開催予定の「マンガが先か!?!原画が先か!?! 『マンガのアーカイブ』のネクストステージに向けて」の当日の流れや役割分担について、打ち合わせが行われた。
- ・シンポジウムで最も伝えたいのは、「刊本（単行本や雑誌）と原画は、車の両輪である。マンガ本をつくるには原画が必要になるが、マンガが商品として市場に流通して評価されない限り、その原画の価値づけもできない。例えば展示のあり方もこの2つを切り離して考えることはできない」ということ。この視点を持ちつつ、今後5カ年にどう事業を展開し、人材育成などの仕組みをどう作っていくかをシンポジウムでは議論したい。（吉村和真）

3. 刊本事業の将来構想について（意見交換）

- ・マンガ分野のアーカイブ整備事業として、独立した形でアーカイブを維持、運営できる仕組みをつくらなければならない。膨大な刊本の分量などを考えると、単独の施設に刊本を全て収容するのは難しく、センターを中心にして分散型ネットワークでアーカイブを構築していくのが基本の考え方だ。今回の刊本アンケートでも「ネットワークに参画してアーカイブにも関わりたい」、「アーカイブを活用した展示をしたい」と濃淡はあるが、前向きな回答も寄せられており、これらの施設と緩やかなネットワークを結び、原画であれば横手市増田まんが美術館（秋田県）、刊本は熊本を基点に事業を進めていきたい。（吉村和真）
- ・マンガ・アニメ・ゲームそれぞれの分野で、センター的な役割を果たす事業主体等を定めて作業を進めていきたい。国内の複数の場所に、地域の大学が主体となって拠点を整備するといった形も念頭に置きながら連携型アーカイブ事業を進めていきたい。（吉村和真）
- ・アーカイブ構築を進めようとするれば、資料や作品など、ものの整理とデータの整理を同時に進める必要がある。国家プロジェクトと位置付けられるデジタル芸術分野横断型のデータベース構築事業が進まないと、各施設が担うデータづくりの作業はストップしてしまう。（伊藤遊）
- ・熊本での取り組みは、NPO法人の熊本マンガミュージアムプロジェクトがこれまで通り中心となって活動すべきなのか。熊本県内の合志市、湯前町、高森町の3自治体は、国際マンガ祭を共同開催している実績があるほか、刊本アーカイブ事業への参画意思も持っている。3自治体の連携組織にクママンが加わり、その上部組織として熊本大学等の機関が全体を統括する図式が一番現実的だと考えている。（橋本博）
- ・今回のアンケートでも専門的な知見やスキルを持った職員がいないという回答もかなり寄せら

第3章 事業実施内容

れており、マンガ分野のキュレーター、ライブラリアン、アーキビストといった人材育成が急務になってきている。連携型アーカイブ構築と並行して、人材育成の仕組みづくりにも取り組まなければならない。(吉村和真)

- 人材育成の仕組みができるのが5年後では遅過ぎる。早期にモデル的な人材育成事業を立ち上げて、5年が経過したころには、その人材が実際に現場で活躍しているという実績を持っていた方が、国も事業化を後押ししやすいだろう。(橋本博)
- 現在、文部科学省は地域密着型の大学間連携を後押ししようとしている。なぜ地域に根差すかという、他の大学での履修単位を所属大学の単位として認める単位互換制度を普及させたい狙いもあるようだ。個人的には、あるテーマや分野別の大学間連携があってもいいのではないかと考えている。例えば関係する複数の教育機関が提携を結び、メディア芸術分野のアーカイブ構築や運営を担う人材の育成や資格認定を推進するような構想も描けるのではないか。(吉村和真)
- 先ほどの発言でキュレーター、ライブラリアン、アーキビストの3つの職種が挙がっていたが、既存の職種でいうとキュレーターは学芸員、ライブラリアンは図書館司書と重なる。しかし、マンガのアーカイブ構築や運営に関わる実際の業務では、従来の学芸員とは資料の取り扱い方や作業の仕方など、かなり違う部分がある。図書館司書は学芸員ほどの大きな業務の違いはないが、マンガの専門知識を持ったライブラリアンは従来の図書館司書の採用枠で働いているケースが大半で、マンガ専門の司書だからといって特別扱いは受けておらず、報酬や待遇は十分ではないのが現実だ。今後、専門知識を持った人材として活躍してもらうには、従来の学芸員や図書館司書とは一線を画した新たな資格制度や雇用形態を確立しなければならない。(表智之)
- メディア芸術を総合的、統合的に取り扱い、資料の収集や保管、展示などを行うことができる人材として、新しい職種名を考えた方がいいのではないか。(吉村和真)
- メディア芸術アドバイザーのような全体をカバーできる名称はどうか。(表智之)
- 連携型アーカイブ事業の拠点施設がメディア芸術の専門職を抱え、全国の美術館や図書館などのニーズに合わせて適切な人材を派遣し、拠点施設側が給与や立場を保障する仕組みも必要だろう。(森川嘉一郎)
- 今年、大英博物館で開かれたマンガ展の担当者が指摘していたことだが、マンガ展の巡回の要請が各国の美術館から寄せられているにもかかわらず、それを受け入れる体制や人材がないため、巡回展を開くことができないそうだ。マンガ文化の世界的なプレゼンスを高めていく上でも、ナショナルセンターやアーカイブ構築の拠点施設で担うことになる人材育成機能は非常に重要になっている。(森川嘉一郎)
- 将来的な話かもしれないが、メディア芸術コンソーシアムを社団法人化すれば、加盟している大学がメディア芸術の取り扱う専門職の資格を認定する制度やカリキュラムをつくったり、経験を積むためのインターンシップの場を提供したりすることがやりやすくなる。すでにあるものをしっかり活用するように発想しないと、「タコつぼ化」して視野が狭くなり、外部状況の変化にも対応できなくなる。(吉村和真)

第3章 事業実施内容

「国内外の機関連携によるマンガ史資料の連携型アーカイブの構築と人材育成環境の整備に向けた準備事業」 2日目「省察会議」開催

日時：2019年11月27日（水）9時00分～11時00分

場所：「奥球磨 ゆのまえ温泉 湯楽里」会議室（熊本県球磨郡湯前町1588の7）

参加者

●刊本メンバー

鈴木寛之・橋本博・吉村和真・伊藤遊・森川嘉一郎・柴尾晋・表智之・松岡星

●文化庁

牛嶋興平

●JV事務局

池田敬二・岩川浩之・藤本真之介・横江愛希子

※敬称略

1. 5年間の活動報告

- ・「特定非営利活動法人 熊本マンガミュージアムプロジェクト」（＝クママン）では、1～2年目は北九州市漫画ミュージアムと京都国際マンガミュージアム、3～4年目は明治大学米沢嘉博記念図書館と連携し、3施設が所蔵するマンガ単行本のうち、2部以上ある複本を受け入れ、整理・分類した後に、熊本県内をはじめ、国内の図書館や集客施設などに提供する事業に取り組んできた。5年目となる今年度は初めて雑誌を高知県内の施設に送った。また、中南米など海外の施設にも、年代や作家、テーマなどで選びパッケージ化した単行本を送っている。ただ、倉庫に集積される刊本の量は増える一方で、これをどう有効活用するかは大きな課題だ。（橋本博）
- ・当初は、北九州、京都、明大の3施設が保存する正本の一部を熊本に集め、サテライト機能を持った拠点を目指そうと計画していた。しかし、3施設に加えて熊本にも同じようなミュージアムをつくるのは無駄も多いと気づき、3年目にはサテライト計画は断念した。京都から熊本に移した正本はクママンに寄贈した。（伊藤遊）
- ・明治大学米沢嘉博記念図書館に寄贈された刊本を一度、熊本に送ってデータベース化した後に明大に送り返すという作業を最初の1年間は続けていたが、負担が大きかったので次年度以降は実施していない。（柴尾晋）
- ・マンガを所蔵図書として増やしたいという希望を持つ公立図書館は多いが、その作業に当たる人員や場所がないという悩みも抱える。明大がクママンに寄贈本のデータ化を依頼して正本として送り返すという事業スキームは、各地の施設をサポートする一つのモデルケースとして今後活用できるのではないか。（表智之）
- ・単行本や雑誌を分類し、パッケージ化して国内外の施設に提供するサービスは、送り先とのやりとりや作業内容など、ケースによってその内容は異なる。この5年間の事例を分析・整理することが、今後の事業のあり方を考える上では重要だ。将来的には採算が確保できる事業にしなければならず、そのためには事業に伴うコストや人件費を正確に把握し、サービスとして提供する場合の料金体系も示す必要がある。（吉村和真）

第3章 事業実施内容

- ・単行本や雑誌を提供してほしいという要望は施設によって千差万別だ。それぞれの要望にきめ細かく応えることも重要だが、リクエストを受け付ける窓口を設け、パッケージをある程度メニュー化して施設側が選べるようにすれば、作業の効率化も図れ、事業の採算性向上にもつながる。
(森川嘉一郎)

- ・複本や半端本を無償提供している現状では、受け取った施設側ももらったものだからと簡単に売却したり、廃棄したりするケースも出てくるのではないか。原画では起こりえない事態だが、単行本や雑誌ではありうる。目録が存在することで、市販されている本とは違う価値があるという発想も生まれる。コストや時間はかかるが、データベースはしっかり構築すべきだ。受け入れ側の施設がリストを制作するというのを、単行本や雑誌の提供を受ける条件とするのも一つの手だ。(伊藤遊)

2. 今年度の事業について

- ・今年度は北九州、京都、明大の3施設から複本を受け入れた。一方、高知には熊本から雑誌2000冊を送る予定。中南米向けには4カ所に1500冊を送る計画で、準備を進めている。熊本県内では、廃校となった松尾西小学校（熊本市）の校舎を利用した施設に、スポーツマンガをテーマに2000冊を選び、パッケージ化して来年4月以降に送る。また、複本を集め、整理・保管やリスト化する際のマニュアルのほか、パッケージ化の手引書を作成することになっている。(鈴木寛之)
- ・ある雑誌の1983年の1月～12月発売号を揃えるといったセット化の作業は簡単にできる。しかし、雑誌にはさまざまなジャンルの作品が収められており、あるテーマや関連性を切り口にしたパッケージ化は選択肢があり過ぎて、現時点ではまだ適当な着地点が見いだせていない。個人的にはパッケージとセットの考え方をミックスした中間という考え方があっていいのではないかと考えている。(松岡星)

3. 今後の展望

- ・クママンは熊本県内の公立図書館や教育機関をつないで刊本のアーカイブネットワークを構築することを目指しており、活動は全国に先駆けたテストケースと位置付けている。県内でも高森町、湯前町、合志市は地域を挙げてマンガを活用した街づくりに取り組んでいる。デジタル目録化され、永久保存の対象となる正本を1つの拠点に集積するのはコストや作業量などの面で負担が大きいため、テーマ別などに分類し、3つ自治体で分担して保管することも検討している。マンガ雑誌は、発行当時の時代性を閉じ込めたタイムカプセルとも言われ、読者の記憶や人生とも深く結び付いており、展示資料としても人気が高いので、将来的にはデジタル化して閲覧できる仕組みも構築したい。さらにマンガと関係が深いアニメ雑誌の収集、保存にも取り組んでいきたい。(鈴木寛之)
- ・中四国や関東地方にはクママンと同じようなアーカイブ事業で中核を担うことができる施設があり、連携も深めているが、今後5年で他の地域にも志を同じくする仲間を増やしていきたい。
(橋本博)

第3章 事業実施内容

- ・全国各地にアーカイブセンターのような施設が乱立するよりも、全国に1つか、災害時のバックアップを考えて2カ所程度、巨大な所蔵空間を持つ中核施設をつくり、人材もそこ集中させ、ムダを排除し、効率的な運営をするのが適正ではないか。(森川嘉一郎)
- ・熊本にアーカイブセンターとなるような拠点を置く場合、現状のNPO法人が運営する形がいいのか、例えば熊本大学等の機関に機能を移管するようなことも考えられるのか。アーカイブ事業を支える専門職の養成といった人材育成への取り組みを視野に入れば、大学が前面に出るのも自然なのではないかと感じる。(吉村和真)
- ・さまざまな事業委託や公的な補助金を受けやすい体制にするために、マンガをテーマにした産官学連携を地域で推し進めたり、地場産業や地元の観光業などとも結びついたりしている形を模索してもいいのではないか。(森川嘉一郎)
- ・合志マンガミュージアムでは、市内に立地する企業から協賛金を募り、それぞれの企業が希望する分野やテーマのマンガを集めた「企業棚」を設けていた。例えば、二輪車や自動車部品を製造する地元企業からは、もっと若者にバイクに興味を持ってもらいたいという意向で、バイクに関するマンガを並べた棚を設けた。棚が足りないため、現在は20社ほどの協賛企業をプレートで紹介している。(橋本博)
- ・京都でマンガミュージアムを立ち上げた時、出版社からはなぜうちの出版物で商売するのかと言われることもあった。文化的インフラとしてアーカイブは重要で、維持するために費用が必要だと、出版社や作家、収集家などに広く説明する必要がある。(吉村和真)
- ・マンガの専門知識のほか、アーキビストや司書としてのスキルを持った人材を育成したり、需要があれば人材を送り込むことができる体制も整えるべきではないか。自治体職員や学芸員、司書などを対象に、アーカイブセンターなどの中核施設で研修や講座を実施するというビジネスモデルも考えられる。(橋本博)
- ・マンガの原画や刊本のアーカイブ事業に関わる専門職を資格として制度化するには、大学が教育機関として関わるのが望ましい。いくつか大学が参加して組織を立ち上げ、カリキュラムや認定制度を整え、検定試験により能力や知識を判定して資格を与える。現在進めている事業のマニュアル制作や、基礎研究を見渡すためのマッピングづくりが、将来的にはカリキュラムや認定制度の下地になっていくだろう。(吉村和真)

3.4.4 マンガ分野合同シンポジウム

日程：2019年12月17日(火)13時00分～17時00分

場所：大日本印刷株式会社 DNP 五反田ビル 1F ホール

「マンガ原画に関するアーカイブ及び拠点形成の推進」／「国内外の機関連携によるマンガ史資料の連携型アーカイブの構築と人材育成環境の整備に向けた準備事業」

『マンガが先か!? 原画が先か!?!』—「マンガのアーカイブ」のネクストステージに向けて—

登壇者

●全体司会 吉村和真

第3章 事業実施内容

- 原画事業 日高利泰・ヤマダトモコ・小野慎之介・大石卓・伊藤遊（進行）
- 刊本事業 表智之・橋本博・柴尾晋・松岡星・鈴木寛之（進行）
- ディスカッサント 赤松健・森川嘉一郎・伊藤遊・鈴木寛之 ※敬称略

1. 趣旨説明（吉村和真）

近年、マンガ・原画のアーカイブに対する注目度が高まっている。国内外のさまざまなマンガ・アニメ関係施設、展示、議論の場が設けられるほか、災害などにより貴重な資料が消失する緊急性の高い事象にも直面している。原画がなければマンガは存在せず、マンガの流通・人気・評価によって原画の価値が変わっていくため、原画と刊本（雑誌・単行本）の両アーカイブ事業は表裏一体である。これまで本事業で進めてきた5年間の成果と総括を共有するとともに、次の5年間に向けた課題と展望を共に考える場としたい。

2. 第1部：「マンガ原画に関するアーカイブ及び拠点形成の推進」事業報告

【マンガ原画アーカイブに関するアンケート調査報告】（日高利泰）

2019年夏、約1,200館の博物館・美術館・文学館に対して、マンガの原画の収蔵や展示に関心があるかを調査するアンケートを行い、652件（回収率56%）の回答があった。

Q1「マンガ原画（関連史資料）の収蔵・展示に関心があるか」への回答は、YESが171件、NOが363件。NOと答えた理由には、館の収蔵方針にそぐわないとの回答が多かった。

Q2「すでにマンガ原画を収集・収蔵しているか。または収蔵する計画はあるか」への回答は、YESが55件あったが、「計画がある」との回答はなかった。また、Q1とQ2の回答から、集めるつもりはなかったが結果的に持っている場合もあると分かった。

Q3「原画をどのような経緯で受け入れたか」への回答は、マンガ専門施設ではなくとも、何らかのイベントを行った際に作家が描いた色紙などを収蔵しているケースがあるようだ。

Q4「将来的にマンガ原画の収蔵を行いたいと考えているか」への回答は、YESが139件、このうちQ2で「すでに収蔵している」と回答した重複34件を除くと105件。NOと答えた中の「地元ゆかりの作家であれば、受け入れを検討しないでもない」と消極的な受け入れ表明のあった20件を合計すれば約130件となる。

Q5「マンガ原画（関連史資料）を収蔵する目的及び収蔵を行う上での課題」への回答は、空間、予算、専門人材、どれも足りないとの回答が最も多かった。

Q6「要望・質問等について」に対しては、地方の館を中心に「低予算での巡回展をやってほしい」との要望のほか、「原画を扱う専門的なノウハウが不足しているので、研修等をやってほしい」との要望が、すでに原画を収蔵している施設からも多くあった。

以上の結果から、マンガ原画の収蔵に前向きな施設は約160件と考えられるが、コミットメントの度合いにばらつきがあるため、収蔵に積極的なのは約1/3と考えた方がいいだろう。リソース面から各館で大規模な受け入れが直ちに可能なわけではなく、支援体制の整備が必要不可欠であり、本事業で構想するマンガ原画アーカイブセンター及びマンガ原画アーカイブネットワークが非常に重要

第3章 事業実施内容

な役割を果たすと考えられる。

【三原順原画の整理と活用】（ヤマダトモコ）

明治大学米沢嘉博記念図書館が本事業内で三原順原画のアーカイブ化を進めることになったきっかけは、『はみだしっ子』『Sons』などの代表作を持つ三原順氏の没後 20 年展を開催した際、来館者の多くが原画を前に涙する姿を目にし、彼女が早世を惜しまれる大切な作家だと認識したことだった。原画の所有者は保管場所やコスト面で困っていたが、当館で原画をいったん預かった状態の調査と整理を進めることで、原画活用の機会も増やせると考えた。

事業 3 年目までは、原画及び原画相当資料のアーカイブ作業を進めた。割り当てた ID とともに原画をスキャンし、プリントアウトしたものを作品カードとして使用する。そして Excel に必要なデータを入力する。なお三原順原画はあくまで預かりしたものであるため、著作権を鑑みて複製できない精度（300dpi）の画像しか残さないことにした。また、原画の附属物散逸を防ぐために OPP 袋で保存しているが、それがよりよい保管法かどうか、今後も検討が必要だ。

4 年目には、札幌にある原画の状態確認と所在不明原画の探索を行ったところ、三原氏の友人が所蔵しているカラー原画 18 枚の状態確認をすることができた。また、三原順原画整理作業の実践から得た知見をまとめた報告書『マンガ原画整理に関する報告書 三原順原画を中心に』（明治大学米沢嘉博記念図書館 2019 年 3 月 20 日発行）を作成した。

今年度 5 年目には、前年度整理しきれなかったデータの整理作業をした後、原画・資料類全件数は 6,337 点を所有者に返却した。ただし、アーカイブデータは共有保管し、今後も運用のサポートをしたい。

三原氏のホーム出版社と言える白泉社から文庫『三原順作品集 LAST PIECE』が刊行されるタイミングで三原順氏没後 20 年展を開催したが、展示を契機に発見された原画もあり、様々に利活用されている。『はみだしっ子』の舞台化（スタジオライブ）、『総特集 三原順』（河出書房新社）、原画を使用して新装復刊した絵本『かくれちゃったのだあれだ』（復刊ドットコム）、2020 年には当館原画事業の集大成となる全カラーイラスト掲載予定の『三原順 All Color Works』（白泉社）が刊行される。

本事業での整理作業は利活用の支援に貢献できたと考える。産官学共同事業の一例として、メディア芸術の文化史資料保存を考える際の参考にしていただければ幸いである。

【マンガ原画修復について】（小野慎之介）

マンガ原画の資料的・芸術的価値が再認識される中で、長期保存対策の構築が求められている。大がかりな修復処置等が必要になる前に、劣化要因をコントロールする予防保存対策と、マンガ原画の健康状態を診断する聴診器の開発、つまりマンガ原画を取り扱う際に参照すべき基準の作成が必要不可欠である。

昨年度までは、横手市増田まんが美術館に収蔵されている原画 311 点の非破壊強度予測に取り組み、さらに制作年との相関関係を確認した。

第3章 事業実施内容

今年度からは、カラー原画の耐光性について調査を進めている。カラー原画に光を直接当てて変色させることはできないため、目立たない箇所に約0.4mmの照射径の光を当ててピンポイントで計測。ISO準拠の染色布「ブルーウール」を変色度合いの比較対象とした。

谷口ジロー氏の原画で評価を行ったところ、ブルーウール・スタンダード2級相当、制作年の違うものについても2級相当との結果になり、国際照明委員会のガイドラインでは、年間の累積照度15,000ルクスアワー（照度50ルクスで10時間×30日間）に抑えて展示すべきと指標が設定されている。また、コピック等のアルコールマーカーは、色によって安定性に大きな違いがある。カラー原画・画材は光に対して敏感なものが多く、これらのデータを基に照度や展示期間を設定しなくてはならない。

アート作品として可能な限りきれいに保存したい、物に付随する歴史の積み重ねを保存したいなど、様々な価値観によって最適な保存・修復のあり方は変化する。このタイミングでマンガ原画の価値を問い直す必要があるだろう。

【マンガ原画アーカイブネットワーク/マンガ原画アーカイブセンターの構想】（大石卓）

横手市増田まんが美術館に原画保存相談の窓口となるアーカイブセンターを実装するべく、本年度は具体的な協議を重ねてきた。当館は、国内外合わせて作家数179人、23万点以上の原画を収蔵しており、2019年5月にまんが美術館単体の施設としてリニューアルした。

2017年からは、作家が生涯を懸けて生み出した原画をお預かりしてアーカイブし、まちづくりに生かす取り組みを始めている。原画データを入力する専用ソフトの開発、1,200dpiの高解像度によるスキャンのほか、原画の酸性化を抑制する中性紙素材の封筒や箱で保管。ガラス張りの「マンガの蔵展示室」は、収蔵やアーカイブ作業の様子を外から見ることができる。倉庫中は紙資源の保存に最も適した温湿度で24時間管理されている。

2019年4月1日からは、地元出身のマンガ家と横手市が共同出資した一般財団法人横手市増田まんが美術財団が指定管理者制度で公設民営型の施設として運営を始め、横手市と財団で原画相談の窓口となる合意がなされた。

センターとしての業務は、出版社やマンガ家、展示施設関係者からの原画保存・処理に係る様々な相談を受け、カルテ作りを進めていく。相談者の希望に合う解決策を一緒に見いだし、全国の関連施設に対して収蔵を働き掛け、その結果をまたマンガ家や権利者に戻していく仕事が主になると想定している。さらに原画の寄贈・譲渡、企画展での活用などを関連するネットワークの施設で行い、緊急処置が必要な原画・資料に関しては、一度プールすることも必要な業務になる。また、アーカイブ専門人材の育成、運営の自立化、収益性のある活用なども担っていく必要があるだろう。

横手市増田まんが美術館の収蔵キャパシティ70万件は早々に限界に達することが容易に想像できるため、全国に拠点を設けながらブロック単位でネットワークを強固にし、オールジャパンで原画の保存に取り組んでいきたい。

3. 第2部：「国内外の機関連携によるマンガ史資料の連携型アーカイブの構築と人材育成環境の整

第3章 事業実施内容

備に向けた準備事業」事業報告

【マンガ史資料アーカイブに関するアンケート調査報告】（表智之）

日本図書館協会加盟館から公立図書館 1,474 件を抽出して、マンガ史資料アーカイブに関するアンケートを郵送したところ、696 件（回収率 47%）の回答があった。

「マンガ単行本・雑誌の収集に関心があるか」への回答は、YES が 71%、NO が 28%。消極的な回答の理由は、スペースが足りない、選書の基準がない、人員の問題、資料収集方針にマンガがない、住民の理解が得られない、地域書店とのすみ分け等があった。

「既に収集しているか」への回答は、YES が 79%だった。単行本の収集数は、1 万冊以上が 29 件、1,000 冊～9,999 冊が 238 件、100 冊～999 冊が 221 件、100 冊以下が 29 件、計測不能の館が 40 件だった。雑誌の収集数は、定期タイトル 10 誌以上が 24 件、10 誌未満が 28 件。冊数は、1,000 冊以上が 17 件、100 冊以上が 14 件、100 冊未満が 9 件だった。

「収集している単行本の主な作家・作品名」への回答は、やはり手塚治虫や長谷川町子など評価の固まった歴史的な作家、あるいは学習性の高い作家に集中している。

「選書の基準について」への回答は、郷土資料、「文化芸術基本法」に基づいて収集、地域課題の入門書として利用できる本のほか、性や暴力に関する本は入れない等があった。

「将来的に収集を行いたいのか」への回答は、YES が 19%、NO が 33%だったが、未回答が半分を占めている。課題としては、スペース、選書、予算、方針、理解、ニーズ、装丁が収集向きではない、絶版で手に入らない、利用者のマナーが落ちる等があった。

「収集する理由・目的」への回答は、ヤングアダルトに読書を推進する、郷土資料、市民サービスとして情報を提供する、外国人が日本語学習に使う等があった。

「収集を行う上での課題」への回答は、スペース、選書、予算のほか、寄贈の受入れの基準が難しくなる、損耗で入れ替えようにも絶版のものがある等があった。

「複本プールから受入れが可能か」へは、不可能・困難との回答が 314 件と多いものの、希望ありも 165 件あった。スペース、送料などの問題があるようだ。

「共同保管倉庫に寄贈いただける本の有無」も、雑誌・単行本ともに困難との回答が多く、理由は「フリーマーケット等で住民に還元すべき」「自治体の判断による」だった。

「ご希望・ご質問等」への回答では、日本文化の一環としてマンガの収集・保存の重要性へ理解を示していただいたほか、相互貸借や実際に取り扱うための研修を望む声があった。

図書館行政の厳しい現状が見られる回答文ではあったが、本プロジェクトが今後パートナーシップを締結していくにあたり期待の持てる結果であった。

【「共同保管倉庫（複本プール）」の構想と展望】（橋本博）

NPO 法人熊本マンガミュージアムプロジェクト（クママン）は、次世代に残すべきマンガ文化資料の選別・保管を進めてきたが、大量に発生する複本（ダブリ本）の処理が課題となり、全国から集まる複本を整理・提供する事業を立ち上げることになった。

第3章 事業実施内容

クママンが所蔵する12万冊の資料に加えて、京都国際マンガミュージアム、北九州市漫画ミュージアム、明治大学米沢嘉博記念図書館及び現代マンガ図書館から送られる本を番号順に組み合わせ、寄贈先・提供先の様々な事情を考慮した「パッケージ」を作成する。かなりの時間とコストが掛かるが、同時に知見やスキルが積み重なった人材が育成されており、今後広がる関連施設に相談役・スタッフとして派遣することも可能だ。

複本プールを担う森野倉庫はアーカイブ施設として機能していないため、西合志議会棟跡を改装して、精査された資料を保管・展示できるアーカイブの拠点としたい。熊本が拠点を持つことで、全国のネットワーク構想にもつながっていくと考えている。

複本のアウトプットがインプットに追い付いておらず、20万冊のキャパシティを持つ森野倉庫が破綻する危惧があるため、熊本市内の廃校にスポーツマンガに特化した施設を作る予定。その他、様々な街の施設のスペースにもプールとしてマンガを配置している。

有名コレクターから貴重なコレクションをまとめてオファーされることもあるため、受入れ窓口業務のほか、マンガに特化した学芸員やアーキビストを育成できるカリキュラムの作成を、熊本大学などと連携して行いたいと考えている。

今後は、アーカイブする複本の選定基準も大きな課題となる。また、現在は文化庁事業の一環として支えていただいているが、次の5年間は自走化を目指したステップへ進みたい。

【国内外の機関連携によるマンガ史資料の連携型アーカイブの構築と人材育成環境の整備に向けた準備事業について】(柴尾晋)

本事業は、これまでの「国内外の機関連携によるマンガ雑誌・単行本資料の連携型アーカイブの構築と人材育成環境の整備に向けた準備事業」で得られた知見と経験を継続し、産学官民・自治体等の連携によるマンガ史資料の収集・保存・活用を実践、その成果を検証して作業手法の深化・開発を図る。また、連携型アーカイブ構築のためのアーキビストを育成、マンガ文化保存の意義を広く一般に啓蒙普及させていくことを目指している。最終目標は、マンガ雑誌・単行本アーカイブの将来構想検討、連携機関のネットワーク構築と持続可能な拠点の形成、マンガ史資料の専門的人材の育成である。本年度は、明治大学、京都精華大学、北九州市漫画ミュージアムの3機関が連携をして、送付するマンガ資料の選択と収集を行い、送付準備ができたマンガ資料を熊本の森野共同倉庫へ移送。熊本マンガミュージアムプロジェクトでは、選別及びセット化とパッケージ化をして国内外連携機関へ移送するとともに、OJTによる人材育成を行っている。

国内連携としては、中間発表会や省察会議等を通して各連携機関と知識の共有と連携を図り、昨年度マンガ資料を移送した湯前まんが図書館と八代マンガミュージアムを視察。

国外連携としては、ブラジル、コロンビア、アルゼンチン、中国にマンガを送付した。コロンビアのエアフィット大学ではマンガに関連したシンポジウムが開催されたほか、送付したマンガは学生にも利用されている。本年度はトータルで約1,500冊を海外に送付予定。

複本が中心であるため資料の傷みがあること、海外へ送付する際の内容の精査、森野倉庫のスペースなどの問題があり、今後は熊本以外にも拠点が必要となるだろう。アーキビスト育成は、大学にお

第3章 事業実施内容

けるカリキュラムや認定制度構築のほか、雇用先の確保が重要だ。

データ作成業務の請負や人材育成講師など、運営資金の安定的な確保とビジネスモデルの構築も検討しなくてはならない。

【マンガ史資料のパッケージについて】（松岡星）

まず連携機関から森野倉庫へ送付された 40～50 冊の本が入っているコンテナを運搬、開封して、本棚に並べた後、『シティーハンター』や『ドカベン』などタイトルごとの小集団でセットを作成。全巻そろっているものを完全セット、そうでないものを準セットと呼ぶことにしている。

セットが完成後、送付用のパッケージにまとめるために、手書きで書誌データを取ってリストを作成し、セットを元の箱やコンテナに詰め戻していく作業になる。セットの書誌データは、レーベル、出版社、判型が分かるように細かく取っている。

パッケージは、送付先のニーズに応じてセットを組み合わせたものだ。実際にパッケージを作成する前には、ヒアリング、インターネットでの検索、現地に詳しい人からのアドバイスを参考にしている。また、海外の送付先にとっては初めての日本のマンガであるため、特に大御所と言われるような作家のマンガを集めたパッケージなども作成。セットをパッケージ化していく際、箱詰めしたタイトルのリストを送付用に Excel で作成している。

「アニメ化されていないマンガは手に取られない」「マンガ愛好家はインドア派が多いためスポーツマンガに関心が低い」のほか、クママンで収蔵している本の特性上、大半が 2000 年代以前の作品であるため、「最近の人気作品が欲しい」との意見があった。全ての要望に応えることは難しいが、受け手に価値を理解してもらえ作品を選ぶ必要があるだろう。

パッケージ化作業に携わる上で、選書に必要なマンガの知識、図書資料の扱いに関する知識を、早い段階から体形的に学ぶ機会があれば望ましいと感じた。

4. 第3部：ディスカッション

- これまでの 5 年間で振り返ると、事業の枠組みや予算の規模で可能なことはかなり実現できていると感じている。刊本や原画の利活用に力を発揮できる人材育成が次の目標になるが、スポット派遣などの実証実験を通して、人材のポスト創出を試みるのが重要だろう。次の 5 年間で避けて通れないデジタル原画は複数枚のレイヤーで描かれており、古典的なアナログ原画とまったく違う整理方法を要することを見据えておかねばならない。日本に影響を与えた海外作品、逆に日本から影響を受けた海外作品も、日本のマンガを捉える上で重要だ。現在は戦後のマンガを主に扱っているが、戦前のマンガも対象とするなら、どのような範囲をアーカイブ対象とするのか議論する必要がある。（森川）
- 1980 年代は原稿のスクリーンコピーや写植が剥[は]がれるような扱いが横行していたが、本事業の丁寧な保管方法に感動した。マンガ原画の耐光性については、知識のない現場の者にとって貴重な研究だ。ネットで公開すれば大きな反響を呼ぶだろう。（赤松）
→報告集としてはあるが、まだ公表できる段階には至っていない。（吉村）

第3章 事業実施内容

- ・収益性があれば、所有者から原稿を寄託されるインセンティブになり、施設の永続的な運営にも寄与するはずだ。(赤松)
→明治大学の事例では、展覧会などが開催される時に無償で即貸し出す条件で寄託された作品がある。(森川)
- ・日本にある全ての生原稿の収蔵を目指すことはできないか。また、作品の知名度などに関わらず網羅的に集めていくのか。(赤松)
→横手のキャパシティ 70 万点に対して、全原画は概算で 5,000 万点だ。(吉村)
→基本的にはフラットに考えていくべきだが、取捨選択と価値評価をしなくてはならない葛藤がある。研究が進む中で経済的な価値も変化していく可能性もある。(伊藤)
→全て残すべきだが物量的に限界がある。郷土資料館を前身とする合志マンガミュージアムは、郷土ゆかりの作家の作品を文化的事業として残す方向もあり得る。(鈴木)
- ・エロマンガなど公序良俗の議論がある作品も収蔵していくのか。(赤松)
→公的な施設と私的な施設で役割分担をイメージしている。(伊藤)
- ・昨今マンガ原画などが海外のオークションで高値を付ける事例がある。先手を打ってアーカイブ施設の魅力を訴えていかなければ、浮世絵の二の舞になってしまう。(赤松)
→オークションの動向によって、議論の前提が変わる可能性はある。(森川)
→想定より早く作品の価値が国内外で大きく揺らぎ始めている。作家、編集者、遺族等も視野に入れておき、積極的な意見交換をしたい。(吉村)
- ・メディア芸術ナショナルセンター構想は、各分野の拠点機能及び国立国会図書館の支部機能を持たせ、既存施設で網羅的なアーカイブを行い、民間が担う収益機能のある施設を併設するビジョンだと聞いている。(森川)
→メディア芸術の各事業によって進捗の違いはあるが、マンガ原画アーカイブのネットワーク構想は実装化を進めている。今後、ハブとしての拠点が東京などにできれば、広い意味でアーカイブをなし得ると考えている。(吉村)
→センターが原画保存などの相談窓口を担う際、横手で全て担うわけにはいかないが、絵や本の保存に多大なノウハウを持った館が仲間になる可能性が見えてきた。(伊藤)
→熊本では、地域活性化のために廃校の利用、集客のためにサービスエリアへのマンガ配置を進めている。マンガを必要としている施設で連携したい。(鈴木)
- ・きちんと管理されていれば、昔の作品を掘り起こし、さらに収益化することもできる。保存のみに集中する人と、それを収益化していく両輪で推進していけないか。(赤松)

第3章 事業実施内容

- ・収益性を追求する次の5年間では、時代を閉じ込めたタイムカプセルでもある雑誌について、展示や利活用に結び付けることを考えたい。(鈴木)
- ・原画自体がなくとも、画像データさえあればマネタイズを考える人もいる。画像データの使い方を検討するためにも、当初は並走していたデータベース事業ともう一度統合していく必要があるだろう。(伊藤)
 - 利活用が強調される中では一体化が不可欠になってくるが、保存方法やアーカイブのあり方も改めて問われることになるだろう。(吉村)
- ・人材派遣のビジョンは、専門的な技能を持つ人材が、マンガ展示に関心のある館へ出向し、その技能に見合った給料が支払われ、公共性の高いミッションを成し遂げていくことだ。(森川)
- ・著作権者不明の孤児著作物はどのような位置付けとなるのか。(赤松)
 - 拠点ができることで収益化の可能性が開ける。ある特定のマンガの1コマがネットミームとして人気を博した場合、その1コマをTシャツにして売れる手軽な仕組みを作れば、死んだ作品が大きな収益を生む構造となる。賛否両論あるだろうが、オークションなどで無軌道に行われる価値付けを調整・保証できる機能をアーカイブ施設が持てば、ネットミームとは逆方向の収益化も可能だろう。(森川)
 - アーカイブのスキルとは違った、プロデュースできる人材が必要だ。(吉村)
- ・人材派遣の実証実験は具体的な提言として参考にしたいが、その人材が仮にナショナルセンターから派遣される場合と、私立大学の施設から派遣される場合だと、受入れやすさが違ってくる。どこにどのようなポストを作るのかも今後の課題だ。(伊藤)
- ・大学が絡むのであれば、文化行政という枠でアーカイブに携わる人材を育成する必要があるだろう。(鈴木)
- ・PixivやTwitterに掲載されたマンガ等もアーカイブ対象となるのか。また、データベース化された際は、一般市民が自由に画像データを使える可能性はあるか。(会場)
 - デジタルとアナログは単純に二分化できない問題もはらんでいるが、視野に入れている。次の事業では自由利用のモデル化も進める予定だ。(吉村)
- ・過去作品の当時の熱量を残し、伝え、よりプロデュースする流れを考えてほしい。(会場)
 - 各年代の文化資源としての価値創出が次の課題だろう。過去作品に目を向けてもらえる関係を作りたい。(鈴木)
 - 展覧会も、既に熱量を持った人ばかりをターゲットにしているのは先細りしてしまう。熱量に巻き込み、その作品を知らなくても来てもらえるようにしたい。(伊藤)
 - 自治体が関わって何かをやるときには、市民のために説明するロジックが難しい。現場の声と理念を突き合わせる作業が始まってくると考えている。(吉村)

第3章 事業実施内容

- ・5,000万点の原画を200人でスキャンするとすれば、37年の期間と約700億円掛かる計算になるため、どこかで収益を考える必要があるだろう。また、スキャナーの選択肢が減ってきていることも考えなければならない課題だ。(会場)
- ・マンガ家の描いたライトノベルの表紙や挿絵など、他のプロデュースで描かれた資料群の取扱いについて伺いたい。(会場)
→人気マンガ家あさぎり夕氏は、BL小説を書き、御自身で挿絵も描かれている。なるべく固まりで集めて、総合的な研究が必要だと実感している。(伊藤)
- ・二次創作の同人誌はアーカイブの視野に入っているのか。(会場)
→マンガ家になるルートとして、同人誌で有名になってスカウトされるケースが増えており、マンガ研究においても同人誌は重要なものとして認識されている。(森川)
- ・マンガ原画が美術品として捉えられてしまうことに危機感を感じている。また、保存管理の方法を広く発信していけるものがあれば望ましい。(会場)
- ・相続の際、作品を破棄・売却されないように率先して取り組むべきだ。(赤松)
- ・この場で挙げた問題意識は政治的な側面も持っているため、MANGA 議連から働き掛けてもらうことが適切だろう。マンガ原画が美術品のように展示される機会もあり得るため、所有者から意見を聞く機会も設けたい。(森川)
- ・具体的な課題も多く挙げられた。タイトルを「マンガのアーカイブ」としたのは、「アートの」ではないという思いも込めている。マンガにおける価値を巡る問題と向き合うため、知見と経験、そして覚悟が問われることを共有したい。(吉村)

付録

付録

1.1 全国公共図書館アンケート「マンガ史資料アーカイブ」に関する調査報告

1) 調査方法と回答数

方法：「日本図書館協会」加盟館から公立図書館 1,474 件を抽出しアンケート郵送
回答数：696 件（47%）

2) マンガ単行本・雑誌の収集に関心がある。

YES：494 件（71%） NO：193 件（28%） 未回答：9 件（1%）

◇KW：スペース、選書、予算、資料収集方針、理解、地域書店とのすみ分け
（KW=Key Word）

3) マンガ単行本・雑誌を既に収集している。

YES：548 件（79%） NO：104 件（15%） 未回答：44 件（6%）

4) 収集しているマンガのおよその分量について教えてください。

【単行本】10,000 冊以上：29 件 1,000～9,999 冊：238 件
100～999 冊：221 件 100 冊未満：29 件 計数不能：40 件

◇KW：学習マンガ、ハウツー本、エッセイマンガ、郷土資料、統計がない

【雑誌】定期タイトル 10 誌以上：24 件 定期タイトル 10 誌未満：28 件
1,000 冊以上：17 件 100～999 冊：14 件 100 冊未満：9 件
計数不能・所蔵なし：8 件

◇KW：児童書、定期、保存期間、廃棄

5) 収集している単行本の主な作家・作品名について教えてください。

「手塚治虫、長谷川町子 手塚治虫文化賞マンガ大賞、文化庁メディア芸術祭マンガ部門大賞受賞作マンガ大賞など」

6) 選書の基準について教えてください

◇KW：郷土、主題性、性、暴力、反社会、人間の尊厳

「文化芸術振興基本法 第 26 条に基づき収集。・地域の産業や生活、福祉等の地域の課題に関する内容で、入門書として利用できるもの。」

「活字と比較するのではなく独自の媒体としてその内容を評価し、ハードカバーのものを中心に収集する。」（資料収集方針より）

「来館する小・中学生に話を聞いたり、書店で人気のものを調査しています。」

付録

7) 将来的にマンガ単行本・雑誌の収集を行いたいと考えている。

YES : 134 件 (19%) NO : 229 件 (33%) 未回答 : 333 件 (48%)

◇KW : スペース、選書、予算、資料収集方針、理解、ニーズ、装丁、絶版

「マンガを積極的に収集している際、利用者（大人）のマナーが悪く、不明本も多かったため。」

「マンガは、購入、収集しないことが、指定管理の指示事項のため。」

8) マンガ単行本・雑誌を収集する理由・目的を教えてください。

◇KW : ヤングアダルト、郷土、読書推進、情報源、知る権利、日本語学習

「図書では得られない速報性と多様性に富み、新主題についての記事が載るなど重要な情報源であり、市民の趣味や生活に役立つ、市民の幅広い要求に応えるため。」

「マンガという表現形態というだけで、収集しない、という理由はないと考える。但し、一般の本に比べて、選書には時間をかけるべきだと思う。」

9) 収集を行ううえでの課題（空間、予算、専門人材、その他）について教えてください。

◇KW : スペース、選書、予算、寄贈、マナー、バランス

「ラノベと一緒に、何でこれは良くてあれはダメなのか等、トラブルのもとになる」

「全巻揃ってからでは旧巻が購入できない。」

10) マンガ資料を集積した「共同保管倉庫（複本プール）」からの本の受け入れ（本題は無償で送料のみ負担）が可能だとしたら、どのような単行本（年代・ジャンルなど）や雑誌を、どのくらいの分量受け入れることが可能かを教えてください。

希望あり : 165 件 不可能・困難 : 314 件 回答保留 : 56 件

◇KW : スペース、送料、貸出、補充、リスト、リクエスト

「当館は既に閲覧室・書庫とも余裕はない。受入するものが永久保存全体であるならば多くは難しい。」

「イベント等の時期にあわせ、展示貸出できる分量」「不可能（職員が足りない）」

11) 収集しているマンガ単行本・雑誌のうち、不要になったものを「共同保管倉庫（複本プール）」にご寄贈いただけたら、どのような単行本・雑誌を、どのくらいの分量、寄贈していただけるかを教えてください。

【単行本】希望あり : 81 件 該当なし・困難 : 305 件 回答保留 : 54 件

【雑誌】希望あり : 18 件 該当なし・困難 : 215 件 回答保留 : 19 件

◇KW : 市民・町民に還元、汚損、送料、寄贈

「利用者の方から寄贈された中にマンガがあれば可能です。収集していたものを除籍し、それを寄贈というのは難しいです。」「寄贈はなし（町内で欲しい方が多く、楽しみにしている）」

「自館の資料を他館に寄贈となると、自治体の判断を要するため、不明」

付録

12) こうした取り組みについてのご希望、ご質問等ございましたらご自由にお書きください。

◇KW：期待、日本文化、相互貸借、送料、汚損、事務作業、都道府県立図書館、専門施設、

デジタルアーカイブ、研修

「個人的には、図書館間のネットワークに「共同保管倉庫」が入り、相互貸借のサービスに協力して頂けると助かるのではないかと思います。」

「現在業務以外を検討する余裕がありません。」

(以上)

1.2 刊本パッケージ作成マニュアル

1.2.1 作業全体の作業の流れ

セット本をパッケージ化する際の実際の段取りは以下のとおりである。

①運搬・開封

倉庫に到着した資料（段ボール・コンテナ等）の運搬・開封

②セット作成

セット＝マンガ単行本をタイトルごと・刊行形態ごとにまとめたもの
全巻揃いとは限らない

例： 「シティーハンター 1～21巻」（ジャンプ・コミックス）

「ドカベン 1巻～17巻」（少年チャンピオンコミックス）

「ドカベン 1巻～10巻」（秋田文庫）

「瞳のラビリンス 全1巻」（講談社コミックスフレンド）など

③（手書き）リスト作成

出来上がったセットの内容をリスト化する。

（この段階でのリスト作成は手書きの方が早かった）

リストに拾いあげた項目の例：

収納先のコンテナ等の番号・タイトル・巻数・作家名・出版社

#097 サバイバル 1～5 さいとう・たかを リイド社

④パッケージ作成

複数のセットをテーマに沿って組み合わせた「パッケージ」を作る

例：少女マンガパッケージ・歴史マンガパッケージ・手塚治虫パッケージ 等

⑤パッケージ内容のリスト化

付録

パッケージ内容を Excel 等でリスト化する。

1.2.2 パッケージ化の順序（2018 年度の作業例）

1) 送付先の決定（2018 年度）

- 国外：①アルゼンチン ②北京大学
国内：①「泊まれるコミュニティスペース 縁側」（八代市）
②湯前まんが図書館（球磨郡湯前町）
③南阿蘇鉄道・高森駅（阿蘇郡高森町）
④湯島（上天草市） ⑤橋本二郎記念 たまな創生館（玉名市）

2) 送付先の特色にあったテーマ付け（＝属性付け）を行う。

3) 送り先の「属性付け」に合わせたパッケージ作成のためにセットを集めていく。

4) テーマに沿った本を手書きのリストから探す。

5) 箱・コンテナ等に詰める。

6) リスト化（Excel 等を利用）。

1.2.3 実際に作成したパッケージ（2018 年度）

1) アルゼンチン

<テーマ>

- ・サッカー（アルゼンチンの国民的スポーツ）
- ・スポーツマンガ（アルゼンチンでサッカー以外に人気があるスポーツのマンガ）
日本の学生生活を描いた作品
- ・スタジオジブリ関連作品（アルゼンチンで人気）
アニメコミック、類似テーマの作品
- ・Cool Japan（日本文化を象徴するテーマ・作品）
忍者・侍・妖怪
- ・「美少女戦士セーラームーン」（アルゼンチンで人気）
戦う女性主人公・変身・恋愛・前世・惑星
- ・「マハルダ」（アルゼンチンの人気マンガ「マファルダ Mafalda」
＝邦題「おませなマハルダ」）関連で、子どもが登場する風刺性に富んだ作品
- ・はじめての日本マンガ（日本マンガ文化の紹介。有名作家の代表的名作。
手塚治虫、石ノ森章太郎、萩尾望都、竹宮恵子など）

2) 中国（北京）

- ・作家別パッケージ

高橋留美子・手塚治虫・富樫義博・鳥山明・北条司・松本零士

- ・中国で知名度の高い作品

「金田一少年の事件簿」「名探偵コナン」「ジョジョの奇妙な冒険」等

- ・中国で有名な 90 年代のアニメ作品

<その他のテーマ>

- ・レディースコミック
- ・少女マンガ
- ・中国の歴史（水滸伝、三国志など）
- ・日本の文化・歴史
- ・短編・ミステリー・ホラー

3) 海外本パッケージづくりの手順

2018 年度は、主としてアルゼンチンはテーマ別、北京は作家別という方針でパッケージ化を進めた。海外移送本については、送り先のマンガ事情や要望が明確な場合は作家別パッケージが属性決めを行いやすいかもしれない。（逆にそれらがよくわからない場合は、テーマ別の方が内容の決定にゆとりが持てる分やりやすいかもしれない。）

①送付先の決定

可能な限り、事前に欲しい本の内容をヒアリングしておくことが望ましい。

②送付先の特色にあったテーマ付けを行う（＝属性付け）。

アルゼンチンに関しては現地のマンガやアニメに関する状況をネットで調べた。そのうえで、現地の人気スポーツを取り扱ったマンガをパッケージの中心に置くことで、マンガになじみがなくとも受け入れやすいようなものも作成した。また、「日本文化」としてのマンガを紹介する意味も込めて、代表的作家である手塚治虫や石ノ森章太郎らの作品を集めたパッケージも作成している。

パッケージの属性付けに関しては、現地の特色にあったものをこちらで考える方法、こちらから現地でぜひとも読んでもらいたいマンガを集めたパッケージを作成する方法、現地からの要望に応答する形で作成する方法、の 3 つが考えられる。

③パッケージ化

パッケージ化は送り先に合わせて「属性付け」を行いセットを集めていく。2018 年度は、近年の人気作品、有名作品、いわゆる定番の名作などはそれほど多くはなかった。そのため、比較的有名なマンガ作品をコアとして、後はうまく関連付けてパッケージを作っていく試みを行った。

付録

(例：あだち充「タッチ」をコアとして、野球漫画の「ドカベン」(水島新司)「じゃりガキ 9」(えだまつかつゆき)、高校生の出てくる漫画「世界はみんなボクの為」(斉藤倫)双子の出てくる漫画「東京バビロン」(CLAMP)「アンドロメダストーリーズ」(アニメコミック版)を組み合わせるなど)。

④テーマに沿った本を手書きのリストから探す。

⑤移送用の箱・コンテナに詰める。

⑥リスト化 (Excel を利用)。

リストの内容 (2018 年度ブラジル送付本の例)

パッケージ名： サッカー

作家名： 大島司

タイトル： シュート

巻数： 1～25

出版社： 講談社

レーベル： 少年マガジン KC

4)国内向けパッケージの作業内容

① 送り先の選定 (今回は、天草・高森・玉名・八代・湯前の熊本県内 4ヶ所)。

② 送り先の要望のヒアリング。

③ 送り先ごとに担当者を決定する。

④ それぞれの送り先にふさわしいパッケージの属性について考える。

⑤ セットを集め、パッケージをつくる。

⑥ リスト化

(項目は「パッケージ名」・「タイトル」・「作者」・「巻数」・「出版社」・「レーベル」・「冊数」)

⑦ 移送用の箱・コンテナに詰める。

5)国内向けパッケージのテーマ

付録

天草：海・レジャー・離島・猫・キリスト教

高森：梶原一騎・コアミックス社関連作品

玉名：1960～70年代の作品・松森正（郷土ゆかり作家）

八代：少女マンガ・教育関係のマンガ

湯前：アニメコミックス・過去に「ゆのまえ漫画フェスタ」に参加した作家の作品

6)国内向けパッケージの作業内容

国内移送用のパッケージ作成は、それぞれの施設の要望がはっきりしていたのでそれに即して行っていく形となった。日本国内の連携先ということで、海外より比較的マンガは手に入りやすいことなども考慮し、マイナーな作品もパッケージに使用した。メジャー作品は館が独自に収集を行っている場合もあるし、必要に応じて先方で入手することもできるだろうという判断の下である。

①天草

明治大学から送付されたセット化されているマンガを大きくジャンル分け（少年・少女・青年・女性）

↓

その中から海辺が舞台・キリスト教を扱っている・猫が出てくるマンガを探す

↓

クママン蔵書の中から本を増補（これらで「シーサイド天草」パッケージを作成）

↓

残ったマンガから作れそうなパッケージを作成（「新谷かおる」「名作選」「ドラゴンクエスト」はこれに相当するパッケージ）

↓

残りの冊数を少年・少女・青年・女性がそれぞれ偏らないように選別（「少年・青年マンガ」「少女マンガ」パッケージ）。

↓

コンテナ詰め・リスト化。

②玉名

1960～70年代作品はかなりの量があるので、その中から選別。コンテナ詰め。

③八代

少女漫画をメインに、レディースコミックが1割、子供向けコミックが1割。

↓

箱詰め作業。少女マンガは同じ本が大量にあるので同一作家の本、同レーベルの本をコンテナに詰めてその中から状態のいい本を選択。

↓

付録

リスト入力。

④湯前

送付先が希望している本の傾向を知る・送付先の状況（本の量等）を知る。

↓

送付先に現在ある本のリストをもらう。

↓

倉庫にある明大送付の本の整理（少年・少女・青年・女性に大まかに分ける）。

↓

クママン所蔵の本から送付先に適した本を選定。

↓

明大送付の本から、送付先に適した本を選定。

↓

リスト化。

↓

移送用箱・コンテナ詰め。

1.3 複本プール資料活用マニュアル

1.3.1 雑誌と単行本の区分

複本プールの多種多様の刊本（単行本・雑誌）は次の手順に従って分類していく（整理棚を使って作業）。まず外観で単行本と雑誌の区分を行い、判断に迷うものは後に回してコードなどで区分する。

1)本の判型

雑誌は週刊誌は B5 判、月刊誌は昭和 30 年代前半まで A5 判、それ以降は B5 判が中心。単行本で一番多いのが B6 判（主に青年誌作品）、次に新書判（主に少年・少女誌作品）、A5 判（主に青年誌作品）、文庫判、と続く。

2)紙質

雑誌はザラ紙、単行本は上質紙を使用。

3)分類コード

単行本は ISBN、雑誌は雑誌コードが付いている
（単行本については 1980 年以前は付いていない）。

付録

1.3.2 単行本の分類

以下、単行本の整理手順について述べる（整理棚を使って作業を行う）。

1)読者の属性による5区分

読者の属性(性、年代)別に5つに分けて記号を付ける。幼年はY、少年はB、少女はG、青年はA、レディスはL

1980年以降は幼年、少年、少女は新書判、青年、レディスはB6に統一（但し「愛蔵版」「完全版」等は例外）

1980年以前のものは内容をみて区分する

2)出版社、レーベルによる区分

出版社ごとにマンガ掲載誌別にレーベルを設定してあるのでそれに従って区分する。

(少年、青年誌の区分例)

小学館：少年向 少年サンデーコミックス SSC

青年向 ビッグコミックス BC

講談社：少年向 少年マガジンコミックス KCM

青年向 モーニングコミックス、ヤングマガジンコミックス YMC

集英社：少年向 少年ジャンプコミックス JC

青年向 ヤングジャンプコミックス YJC

3)特定作家の切り出し

作品タイトル数(巻数ではない)が30点以上ある作家の作品を切り出す

例) 手塚治虫、藤子不二雄(藤子・F・不二雄、藤子不二雄A)、
石森章太郎(石ノ森章太郎)、横山光輝、永井豪、萩尾望都、
柳沢きみお、さいとう・たかを、梶原一騎(原作)、
小池一夫(小池一雄)(原作)、本宮ひろ志、水木しげる、白土三平、
松本零士、里中満智子、高橋留美子、あだち充 など

4)作家名による区分

作家名によって区分して50音順に並べる。作画、原作が分かれている場合には原則として作画者の名前で分け、その上で巻数順に並べる。

5)セット、パッケージの作成

セットをつくり、巻数が多いものは一括してラップテープ等でまとめ、「完結」「未完」「抜け巻」等を表示して貼り付けておき、コンテナに収納する。

付録

セットが溜まってきたら以下の手順でパッケージを作りコンテナに背表紙が見えるように収納する。

パッケージの具体例は以下のようなものがある。

①作者による名寄せ

例) 手塚治虫、さいとう・たかを、松本零士などの本を集めたパッケージ

②同年代

1970年代から10年刻みで区分した80、90、2000、2010年代のパッケージ

③同ジャンル

例) スポーツ、妖怪、ホラー、忍者、時代劇、アクション、恋愛、SF、歴史モノ、医療、育児、哲学、地域、転生、進路決定、農、林、水産業、文学、ゲーム

④短編集

3巻以内で完結している短編だけを集めたパッケージ

(参考：ブックライブ <https://booklive.jp/bkmr/complete-comic-in-1volume>)

⑤長編

50巻以上の長編を集めたパッケージ(100巻超えは除く)。

⑥must本

時代を超えて人気のあるスタンダード的なmust本(定番の名作・人気作)

(参照『殿堂入りコミックランキング150：マンガ史50年が生んだ名作はこれだ!』メディアファクトリー 等)

1.3.3 単行本のデータ化

以上の分類整理が終わったら、Excel等を使って以下の項目をフォーマットに入力する(可能であれば文化庁データベース等も利用)。

タイトル、タイトルカナ、作家名(原作者名)、作者名カナ、巻数、出版社、レーベル、発行年月日、(版数、刷数)、特記事項

タイトル、作者のヨミは奥付のローマ字表記を参照、不明な場合は検索する。

特記事項には「著者サイン付き、所蔵スタンプあり、貸出票貼り付け、カラー口絵付き、帯付き、初版特典付き」などの情報を記入する。

例)

ドラえもん/ドラエモン/藤子・F・不二雄/フジコエフフジオ /10巻 /小学館 /てんとう虫コミックス/2019年12月1日/初版第1冊 /帯付き

1.3.4 雑誌の分類

雑誌は、床面にシートを敷いて分類・整理に当たるのが能率が良い。

①属性による5区分

読者の属性(性、年代)別に5つに分けて記号を付ける。少年誌にはタイトルに「少年」、青年誌には「ヤング」が付いていることが多いが、少女誌、レディズ誌はタイトルだけではわからない場合がある。

幼年誌 Y、少年誌 B、少女誌 G、青年誌 A、レディズ誌 L

②ジャンルによる区分

四コママンガ誌、アニメ誌、アダルト誌、趣味(釣り、ギャンブル、乗り物、食べ物 ほか)。

マニア誌、コンビニ本などは別個に区分しておく。

③出版社による区分

出版社ごとに少年誌、少女誌、青年誌、レディズ誌を区分する。

派生誌はメインタイトルの雑誌に紐づけておく。

例)小学館

1) 幼年誌

メイン誌 コロコロコミック

派生誌 コロコロアニキ、別冊コロコロコミック Special、ミラコロコミック、コロコロイチバン! 等

2) 少年誌

メイン誌 少年サンデー

派生誌 別冊少年サンデー、少年サンデーS (スーパー)、少年サンデーGX、ゲッサン 等

3) 青年誌

メイン誌 ビッグコミック、ビッグコミックオリジナル

派生誌 増刊ビッグコミック、増刊ビッグコミックオリジナル

メイン誌 ビッグコミックスピリッツ

派生誌 月刊スピリッツ、月刊 IKKI (※休刊) 等

4) 少女誌

ちゃお、ちゃおデラックス

Sho-Comi、ベツコミ、プチコミック、姉系プチコミック 等

5) レディズ誌

flowers、Cheese! 等

付録

④年代・号数順に並べ直し（整理棚使用）

出版社、雑誌タイトルの塊ができたなら年代ごとに区分し、さらに号数順に並べる。この時、複本は抜いておき、別冊付録や付属資料も別にしておく。

⑤出版社別の区分

小学館、集英社、講談社、秋田書店、白泉社、角川書店、少年画報社、光文社、徳間書店、日本文芸社、実業之日本社、メディアファクトリー、エンターブレインほか

⑥雑誌タイトル別の区分

例)小学館の場合

ビッグコミック、ビッグコミックオリジナル、ビッグコミックスピリッツ、ビッグコミックスペリオール、ビッグゴールド、その他のビッグコミック系雑誌

⑦雑誌のセット、パッケージ作り

同一タイトルの年代順・号数順のセットが出来たらラップテープ等でひとまとめにしてコンテナに収蔵する。2セット出きたら収納用ダンボール等に入れタイトル、年代、号数を表記して貼り付ける。

1.3.5 雑誌のデータ化

① 雑誌データの入力

Excel を使って以下の項目をフォーマットに入力する

（可能であれば文化庁 DB 等とも連携）。

出版社、雑誌タイトル、号数、発行年月日、発行間隔、属性(対象性、年代、ジャンル)、特記事項

入力の際以下の記号を使うと、検索・整理が容易になる。

1) 雑誌タイトル

ジャンプ J、サンデー S、マガジン M、花とゆめ H、なかよし N、
ビッグコミック BC.、ビッグコミックスピリッツ BCS、
ヤングジャンプ YJ 等

2) 派生誌

付録

メインタイトルの前についている誌名の頭文字を記号で表す。

(例 ウルトラジャンプ U、別冊マガジンは B 等)

3) 号数

通し番号か一年サイクルの号数かは雑誌によって異なるので注意

4) 発行年月日

昭和 23 年 9 月 7 日は 480907 これを雑誌の基本的な番号としておく。

(1900 年代の 19 はカット、2000 年代の 20 はカット)

5) 発行間隔

月刊 M、月 2 回刊 S、週刊 W、隔週 BW、季刊 Q、年刊 A 等

6) 読者の属性(性、年代)

少年 B、少女 G、青年 A、レディス L 等

7) 特記事項

表紙のメイン作品タイトル等

1.3.6 刊本収蔵の今後の課題

今後は全国で保管に困っている貴重本コレクションの「駆け込み寺」的機能を持つ収蔵施設（仮称：刊本アーカイブセンター）が必要になることが予測される。

この刊本アーカイブセンターで人材を雇用できる予算の確保や、関係諸機関が連携して人材を育成するアーキビスト養成講座の設置も必要となるだろう。

今回の公立図書館アンケートの結果を見れば、今後は、入手困難な単行本へのニーズはありうるので、複本の大量保管ができる場所（複本プール）の確保が望ましいことは間違いないが、どの施設・機関がその役割を担うかは十分な検討が必要である。複本から収益があげられるような仕組みも必要となるだろう。

現在のクママン収蔵庫（複本プール）からは、期間を限定したうえで、県内を中心とする公共図書館、学校図書館、自治体施設等に複本を寄贈するイベントや、複数回に分けてのリサイクル本持ち帰りイベントの実施も今後可能である。

本報告書は、文化庁の委託業務として、メディア芸術コンソーシアムJV事務局が実施した2019年度「メディア芸術連携促進事業」の成果をとりまとめたものであり、第三者による著作物が含まれています。転載複製等に関する問い合わせは、文化庁にご連絡ください。